



No.99

2015年7月7日

公益社団法人日本山岳会富山支部

第30回播隆祭行われる



6月7日(日)、富山支部主催の「播隆祭」が播隆上人の生誕地である富山市河内の播隆上人顕頌碑前で行われた。昭和58年に支部創立35周年記念事業として顕頌碑が建立され、以降この地で行われてきた式典も今年で30回目の節目を迎えた。数日前から雨模様の日が続き心配された天候であったが、この日は朝からさわやかな青空が広がる好天に恵まれた。午前8時頃から富山支部会員や生家の会の方々が顔を出し式典の準備が進む。また久しぶりの顔合わせに会話がはずむ。会場には次々と人が集まり一般登山者

を含めて約50名となった。参加者には山田支部長がまとめた「30回のあゆみ」が配布された。

午前9時、河合事務局長の司会で式典が始まった。先ず挨拶で山田支部長は資料をもとに播隆祭のあゆみを振り返り、長きにわたって続けてこられた支部の先輩や関係個所の先人の方々に感謝するとともに、今後も続けていく決意を述べた。生家の会世話役の大作一男さんは、富山支部に播隆祭を続けてもらったと感謝され、30回ということで顕頌碑建立時の寄付呼びかけの文書や建設費のことなどご自身が保存されている貴重な資料を紹介された。また平成21年に白樺ハイツで行われた播隆シンポジウムの盛大な開催についても印象深い出来事と述べられた。続いて参加者全員が焼香し播隆上人の遺徳を偲んだ。

次に大山歴史民俗研究会会員でもある本多秀雄会員による記念講話「熊野川上流の旧村落について」があった。河内に入るには山筋、谷筋のいくつかの道があったが、いずれも大変な道のりであったようだ。ご両親が当地(隠土、小原)出身という本多さんは、かつて歩いた山道の思い出などを交えながら、この地区の地勢や歴史を語られた。昭和40年前後の離村まで実に数多くの村落があり、そこでは植林や馬の放牧がされていたこと、多くの神社や学校があったこと、また千野谷の黒鉛鉱山や熊野川ダムに関することなど初めて聞く貴重な話であった。播隆上人が育った山河が身近に感じられるようになった。この後は恒例の記念撮影、式典のお供えをいただいで交流会が行われ、30回の記念となる行事を終えた。(参加支部会員13名)

(金尾誠一 記)



高頭山記念登山

(参加者) 近藤晋、川田邦夫、渋谷茂、永山義春、本郷潤一、高岡山岳会 (本郷夫人、阿部、渡部)、山田信明

播隆祭の直会 (交流会) を途中で抜け出した 9 名 (高岡山岳会の女性 3 人組を含め) で高頭山へ向かう。登山口にはすでに多くの車があった。いつものように導水管と合流する場所で休憩、小原川流域の新緑をながめて汗を拭く。導水管の巻道ではアサギマダラの飛翔を期待したが、今日は飛んでいなかった。水平道の分岐から稜線までの急登も手直しされた階段を踏みしめて一気に登り、あとは木漏れ日の登山道をゆっくり登っていく。正午になったところで昼食にする。ブナの木の前、下から吹いてくる風もこちよ。本郷さんが冷たいそうめんをふるまってくれて感激する。先に登ったパーティが次々下山してくる。



先行していた近藤さんが頂上の手前で降りてきて、われわれと合流したので一緒に頂上をめざすことになった。トップに行くのは肋骨のけがのためこの冬スキーもしないで養生していた永山さん。全快最初の山行なのに元気である。川田さんも体調に自信ないと言いながらも山頂まで着いてしまう。支部でぜひ頂上の標識を建てようなどと話し、記念写真を撮ってから下山する。途中登山道に覆いかぶさって頭に当たる木を何本かノコギリで伐る。ロボット雨量計小屋の残骸がきれいに片づけられていた。高頭山に登山道が開かれた頃はまだ雨露をしのぐのに使用可能な木造の小さな小屋だったが、4時過ぎに登山口に下り立ち解散となった。標準コースタイムどおりのゆっくりしたペースの記念登山であった。

(コースタイム) 10:50 登山口—11:50 水平道分岐—14:00 高頭山頂上—14:50 雨量計小屋跡—15:30 水平道—16:15 登山口

(山田信明 記)

* 高頭山登山道整備の概要

5月30日(土) 8:00 木戸自動車集合

参加者: 鍛冶(現地直行)、山田・島津(草刈り機)、有澤・山岸(軽トラ)、金尾、本郷、渋谷、北田、森田の10名。先頭の島津氏が導水管途中でクマに遭遇。昼食時、曼荼羅教室に通う北田氏からネパール大地震の救援募金についての話。下山後播隆上人顕頌碑に寄ると榎清水が復活していた。



平成 27 年度富山支部総会を開催

と き : 2015 年 4 月 17 日 (金)

と ころ : 富山電気ビルディング

平成 27 年度の富山支部総会が開催されました。議事については、以下の通り報告と計画について審議され、了承されました。

- ・平成 26 年度事業報告
- ・平成 26 年度収支決算報告 (監査報告)
- ・平成 27 年度事業計画
- ・平成 27 年度予算計画

総会終了後、全員の記念写真を撮り懇親会に入りました。本会も年々高齢となりますが、それなりに若い新人も入会しましたので、公益社団法人の活動に活性化が出てきそうな気がします。

参加者 : 山田支部長以下 23 名 (有澤辰彦 記)

第 6 回「山岳講演会」を開催

日本山岳会富山支部主催の第 6 回「山岳講演会」が 2015 年 2 月 24 日 (火) に富山市民交流館で開催されました。『越中の百山』から『富山の百山』へ」という演題で山田信明支部長から、富山県山岳連盟富山 100 山委員長として携わった、富山の 100 山選定からガイドブック出版までの経緯についてお話いただきました。山岳連盟の関係者に留まらず一般の山の愛好家の方々も大勢参加され、88 名の参加者で会場は熱気に包まれました。

1981(昭和 56)年に改訂版が発刊された富山県教職員山岳研究会・高体連山岳部による『越中の百山』という本の中では 700 m 以上の 123 座が紹介されておりますが、北アルプスの主稜線の山は除かれています。今回の富山の 100 山選定にあたっては、県内市町の山を全て網羅したいという趣旨で進められたとのことでした。正に「高山必ずしも尊からず」ということで、地域に根ざした選定だったということでしょう。



昨年 8 月に北日本新聞社から出版された『富山の百山』は、富山県山岳連盟加盟団体の皆さんを中心に現地踏査を経て分担執筆により完成したものです。国土地理院の地形図表記についての確認や全国的に紹介されている〇〇名山との表記に関する調整等かなりの苦労があったことが伺えました。原稿作成時は、ちょうど日本山岳会での『新版日本三百名山登山ガイド』の編集と時期がかさなったことから担当した富山支部の会員は苦勞されたようです。

今後は、この富山の百山の頂上に共通デザインの標識が設置できればという意見がありましたが、近い将来実現できることを願っています。また、この本が発刊されてから、登山者が増えたという情報も入ってきています。今回の興味深い内容について、多くの人たちに知っていただく機会があればという個人的な思いも感じました。これから、この本が活用され、多くの方々が、安全で楽しく、地元の自然の素晴らしさを感じてほしいと思った講演会でした。

関係者の皆様どうもお疲れ様でした。 (河合義則 記)

五支部合同スキー山行（福井支部主管）

2月28日(土) 午後本郷さんに迎えに来てもらい山田さん方で山田、渋谷、島津各氏と共に出発。小矢部PAで富山勢と合流し3時に白山白峰温泉郷の御前荘へ入る。既に各支部の懐かしい面々は殆ど集まっていた。早速温泉に浸かり4時から乾さん(白山ガイド)による白山にまつわるお話を聞き6時から懇親会に移る。

今回の席順はくじ引きで各支部マチマチの席となりちょっと馴染みにくかったがお酒が入るとそれもすぐ消えた。福井の宮本さんが病気で来られず顔を見られなくて残念だった。彼がおれば最高年齢(86歳)参加なのだ。そうすると小生が最高年齢かと思っていたら京都の宗實さんが85歳と1歳上の姉さんだと言っていた。彼女は富山の時も参加しており、また石徹白の時も参加されており、すっかり顔見知りなのだ。参加の半数は70歳以上で、顔はわかるものの名前は浮かばないが少し話しているとすぐ思い出される。ともあれ山仲間との集いは実に楽しい。



二次会も酒好きが20人ほど、10時頃までわいわいがやがや、話に花を咲かせていた。今日はまずまずの曇空で夕方、窓外に白山がきれいにその白い峰を見せていたが明日は雨の予報、さてどうなるだろうか？

3月1日 朝起きるとザーザー降り、早速代表者会議を開いたら護摩堂山登山は、全員中止と即決だ。皆の年齢からもさもありなん。フロントで記念撮影をして来年の富山大会での再会を期し散会となる。

9時富山勢は勝山の「恐竜博物館」を見学に出かけた。これがまた随分立派な博物館で大勢の親子連れで賑わっていた。帰路、鍛冶さんの案内で勝山の「長八」という蕎麦屋へ行った。勝山の裏小路の今にも潰れそうな小さな木造の店で、テーブルが二つしかなく、10人程しか入れない。隣の部屋で職人が石臼でそばを引いていた。ここの蕎麦の美味しいこと！おろし蕎麦一枚470円、みんな2杯を平らげていたが、本当にこんな美味しい蕎麦を食ったことがない。今日の雨は朝から晩までひと時の休みもなく降り続いていた。

帰りに山田さん宅で「ボルネオのホワイトコーヒー」をご馳走になり、山スキーは出来なかったが充分満足の一日は終わった。

参加者：山田、近藤、鍛冶、川田、本郷、渋谷、島津、若尾、山岸、菅田 (近藤 晋 記)

3月例会山行 タカンボウ山 1119.6m

2015年3月8日(日) 曇り

参加者:山田信明、本郷潤一、菅田静子、米谷真由美(菅田さん友人)、渋谷茂

天気回復が遅れている。家を出る時は、雨が降っていた。福光ICに集合。上平村に向かう。五箇山トンネルを出ると、村内や山々にはたくさんの雪がある。上梨の「喜平」の奥さんの話では、今年は、四回屋根の雪下ろしをしたとのことである。

道の駅「ささら館」の前で156号線からタカンボウスキー場に入る。スキー場には、スキー客の車が10台くらい並んでいる。タカンボウスキー場は1987年にオープン。最初にタカンボウ山に

登ったのは、1980年4月21日だった。「タカンボウ山は草谷、境川、赤摩木古谷、庄川に囲まれた山で、スキー場の予定地にもなっている。」と拙著『愛山記』に書いている。タカンボウ山、マルツンボリ山、カンザオ山など、カタカナの名のつく山が五箇山にある。カンザオ山は「蟹沢の転化」、マルツンボリ山は、「丸いつンボリのような山」「ツンボリは丸っこい台、容器、道具などをいう」タカンボウ山とは、「高シ峯の意」だと、山崎富美雄さんは、『富山県山名録』（桂書房）に書いている。山の名は、麓で暮らす人々と山との交流がうかがわれて興味深い。



今日、すでにタカンボウ山を目指して3パーティが入山しているとのことだ。なかなか人気がある。スキーリフトを乗り継いで、スキー場上部で降りる。山々は深々と霧に包まれている。雨はやんだようである。送電線横の尾根を、カンジキを履いて登って行く。山田さんは山スキーである。痩せ尾根の急登で始まる。尾根にはヒメコマツが多く生育している。ブナやミズナラも見られる。右手は、草谷へ急な斜面が落ち込んでいる。注意しながら急な雪面を登って行く。最初は、身体がなれないのでなかなかペースは上がらない。標高900m 辺りまでは、急な斜面で、雪はたっぷりついている。急斜面を登り切って幾分傾斜が緩やかになった。先行のパーティのトレースがついているので、頂上までのルートは外すことはない。

左手にスギの木が植えられていて、右手はブナの林である。それも、見事なブナの巨木が霧に煙る大地に林立する。ところどころホオノキも見られるが、ほとんどブナの純林である。ブナの木にヤドリギがたくさんついている。深い霧に包まれたその姿は、魅惑的である。雪とブナと霧の取り合わせは、早春の山への思慕をかきたてる。まるでスキーゲレンデのような広い尾根には、ウサギやカモシカ、キツネの足跡が縦横についていて、山はとても賑わっているようである。少し下って、登り切ると広いタカンボウ山山頂である。バックカントリーのグループが休憩した雪のテーブルがあった。付近には、10名ぐらいの登山グループが食事をしている。我々も昼食とする。

帰路、頂上から少し下ってくると、ブナ林の中に陽の気配を感じるようになる。痩せ尾根を下るころには、麓の西赤尾の集落やブナオ峠に向かう林道が見えてくる。スキー場を下って下山。山頂までは約2時間の行程である。
(渋谷 茂 記)

小島烏水祭と第31回全国支部懇談会に参加して

第31回全国支部懇談会は、4月11日(土)～13日(月)までの日程で、四国香川県高松市で開催された。富山支部からは河合事務局長と渋谷が参加した。4月10日 JR で高松市に向かい前泊する。岡山からスカイライナーで四国にわたる。島々を浮かべる瀬戸内海の景観は美しい。4月11日朝、高松駅で送迎バスに乗り、小島烏水祭の開かれる峰山公園に向かう。烏水祭は今年で三回目、烏水を偲び、詩吟の朗詠、参加者全員で山の歌を合唱する。烏水祭の後、桜散る公園の一角で四国支部の皆さんから、本場讃岐うどんの接待を受ける。さすがに美味なる味わいである。

全国支部懇談会は、宿泊場所である「花樹海」で行われる。高台にあるお宿は、瀬戸内海に浮かぶ屋島を望む景勝地である。小島家菩提寺で東京所在の真言宗豊山派常泉院住職、大正大学名誉教授である平井宥喜慶氏から「小島烏水 高松と江戸」と題した記念講演が行われる。「小島家がな

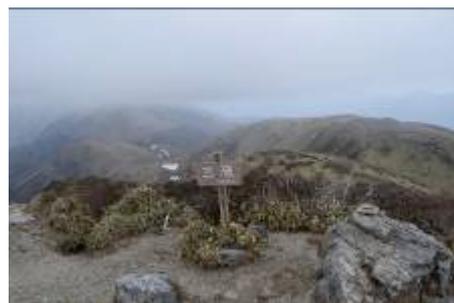
「ぜ当寺院を選んだのか」について、小島家は、「代々讃岐高松藩の家老職の格を有する武家出身」で、水戸藩とは本家、分家の親類関係でもあり、「水戸家の当山」の常泉寺を選んだとされる。小島家は江戸時代から常泉寺の檀家であった。高松藩松平家の興りは寛永時代で、水戸家初代藩主が「入城してきて始まった」。興味深い話に聞き入る。続いて、「四国の山はなぜ美しい」と題して、四国支部の清家一明氏が、写真家の石川道夫氏の撮影された四国の山々を紹介される。四季折々の美しい山々と、清家氏が少年時代から「山に抱かれて」感得された、山々の「美」についての絶妙な解説に聞きほれる。シンポジウムは、「四国の山はなぜ美しい」をテーマに、四国支部会員の皆さんによるトークがあった。

懇親会では、小島烏水祭と懇談会を「祝福する歌」が披露される。阿波踊り連「水玉連」の皆さんによる「阿波踊り」で会場は大盛り上がり、全国の支部から寄せられたおいしいお酒を飲みながら有意義な時間を過ごす。

4月12日の記念山行等は、標高422m、讃岐富士と称する飯野山コースと空海誕生の寺とされる善通寺を巡る観光コース、標高1894m、「四国一美しい日本三百名山」である三嶺に登る登山コースが用意される。我々富山支部は、三嶺に登る一泊二日コースに参加する。天気は、曇りである。「花樹海」を午前6時に出発。一路、標高910m、名頃の登山口に向かう。若葉が初々しいクスノキの街路樹が続く市街地を離れて、小山が点在する里の景色に興味津々。「日本昔話」を思わせる。山に入るにつれて自生のミツマタが、クリーム色の花を咲かせている。移り行く車窓の光景に眠気も忘れて、マイクロバスで走ること三時間半、登山口に到着である。里は桜の時期が終わり、木々は萌黄色。だが、山は春にはまだ時間がある。

ヒメジャラやダケカンバ、トチ、カエデなどの落葉広葉樹の生育する急な登山道をしばらく登ると、比較的緩やかな登山道が続いている。樹木の林床には落ち葉が敷き詰められて、茶色の敷物を敷いたようである。左手から冷たい風が吹き抜ける。四国の山は暖かいという先入観があったが、とにかく寒い。右手に一際伸びあがった三嶺の頂が見えてくる。一旦林道に降りてすぐ登山道に入る。ブナの木や、ダケモミの巨木が現れてくる。ダケモミの生育する「ダケモミの丘」を過ぎて、上り調子になる。辺りは、以前には、林床は一面ミヤマクマザサに覆われていたそうである。この山でもニホンジカの被害が山の崩壊を引き起こすほど、深刻な状態だと伺った。登山道は、尾根を右に折れて、ダケモミの林を抜けると、ミヤマクマザサが現れ、樹木の背丈が低くなる。巨岩を見てダケカンバにつかまりながら登れば、「高山」っぽい装いになる。谷を挟んだ左側はなだらかな山々が連なっている。マユミの木が生育し、覆いかぶさるような奇岩を仰ぎ見て、岩の多い急勾配を登る。斜面一帯にミヤマクマザサが生え、緑の絨毯を敷いたようでとても美しい。この光景が三嶺の表情なのであろう。急登を登りきれば頂上へと続く稜線に出る。稜線は強い風が吹き抜ける。まだ芽吹いていないコメツツジが群生している。「三嶺・天狗塚のミヤマクマザサ及びコメツツジ群落」が1994年に、国の天然記念物に指定された。花の季節といい、秋の紅葉といい、コメツツジが山肌を美しく飾り、ササの緑との対比もさぞ見事であろう。頂上への分岐に雪を残す青い池がある。一年中涸れることがないとのこと。県営の三嶺ヒュッテに到着し昼食である。

食事後、頂上まで約15分登る。山頂からは、四国山地の雄



大な景観が眺められる。今日は、生憎と雲が低く 360 度の展望は得られない。でも、1816m 西熊山、1812m 天狗塚へと続く峰々が、全面ミヤマクマザサに覆われていて、「富山では見られない」眺めである。頂上で記念撮影をして下山。ミヤマクマザサが登山道を覆い隠している。尾根から少し下ると、風もなく暖かい。急な斜面を下り切ってコルで一枚脱ぐ。振り返ると長野県の四阿山を思わせるような優美な山容が望める。谷にはまだ雪が残る。三嶺との別れを惜しみながら、尾根道を下って行く。なかなか足に堪える下山である。さすがに山慣れた面々、とにかく早いペースである。途中、急斜面の嫌なトラバースもあり、なかなか気が抜けない。ようやくヒノキやスギの植林した林に入る。殺風景なスギの林の中には、ミツマタがいたるところで花を咲かせている。「スギ林の中のシロチョウチン」などと名付けてみた。薄暗いスギ林に、灯をともしているかのようなのである。疲れた気分も好転、軽快に下り、「いやしの温泉郷」の駐車場に着いた。桜が満開、聞くところによると一週間ばかり開花が遅いとのことである。

桜の歓迎を受けて湯に入れば、今生の幸せ感に包まれる。夜は、キャンプファイアを囲みながら、四国支部の皆さんによる手作りの地元食材に舌鼓。本当によくお世話をして戴いた。感謝の言葉もない。菅生ロッジで足の痛みを感じながらシュラフに潜り込む。翌日、高松駅までお送りいただき、帰路について。

三嶺は、徳島、高知県とも地元は「みうね」「みむね」「みつむね」と呼び、「徳島県三好郡東祖谷山村と高知県香美郡物部村にまたがる剣山山系第三位の高峰」(配布資料)である。

(渋谷 茂 記)

5 月例会山行 元取山 196m

2015 年 5 月 17 日(日)

参加者：山田、有澤、近藤、金尾、山岸、渋谷、本郷

今回、富山支部 5 月度の例会山行として、昨年、県岳連が編纂発行した『富山の百山』の中から高岡市福岡町にある元取山を選び、北日本新聞社の後援の下に実施した。

呉東の魚津、滑川、富山からの参加者も含めて総勢 21 名。好天の下、地元の鳥倉地区自治会長等の挨拶があった後、鳥倉集会所を出発した。加茂集落の案内板前で、同地区におられる永田氏から歴史、遺跡、自然等の説明を受けて登山開始となる。間もなく加茂横穴墓群(かもおうけつぼぐん)、ねらみ山砦跡、二の丸跡へと整備の行き届いた「笹百合街道」を進み、鴨城主郭跡に着く。各々心地よい汗をかきながらも、当支部会員等によるガイドに耳を傾け、ゆっくりと里山を登る。開始から 1 時間半足らずで元取山山頂に着く。三等三角点、「元取山遠望」(蓑島良二作の漢詩)看板等が設置されている。その前で、同行の又川岳寿氏が吟詠され、参加者一同が感嘆して聞いた。眼下には砺波平野の散居村、間近には二上山、稲葉山、宝達山、遠目には北アルプスを眺めることができる。南砺の山々は天気良すぎて、遠くはうっすらと霞んでいる。折からの北陸新幹線の通過を見るなど、充分すぎる時間を共有し、11 時 40 分過ぎに鳥倉集落下山口に到着した。道中、ササユリ、ヒトリシズカ、オウレン、ショウジョウバカマ、シャガ等々を見ることができた。集会所内で和気あいの昼食をとり、解散となった。

(本郷潤一 記)



私のかかわった山岳遭難 その3

人生最大の痛恨、そしてチロルの創業

佐伯郁夫

不二越山岳会の事故後、富山県は劔岳に登山届出条例を制定し、池ノ谷への入山を禁止すると3月24日県議会で可決した。それは12月から施行されるので、11月下旬に池ノ谷から三ノ窓に登り小窓尾根上部を偵察し劔岳頂上から早月尾根を下ることにした。

魚津岳友会池ノ谷遭難

1966年、この年の夏山合宿で劔尾根2峰南壁から高塚が墜落重傷となり11月山行の強力メンバーがいなくなったので少し迷ったが、私がリーダー、城広師、網谷山三、三浦敏光の4名で入山することになった。池ノ谷二俣に着いたころの積雪は膝ぐらいのものであった。天候は少しずつ悪い方向に向かっていった。明日まで待機し、早朝から登って1日で山頂へ抜ける計画へと変更した。左俣に入って



すぐの右岸側の台地にテントを張り終える。城、網谷は目の前の岩場にトレーニングで登りたいという。それは30分にもみたくない小さな岩場である。登っている様子は三浦と時々眺めていた。テントから顔を出して様子を見ると、ちょうど登攀を終了したところであり、あとは裏側に回りこんで下ってくるだけである。コンロで雪をとかし温かいミルクを沸かす。ミルクができたのに戻っていない。そして姿が見えない。上を見ると高さ40cmぐらいの破断面が横に延びている。私たちはテントを飛び出し二俣周辺を探す。人が埋まるような積雪ではない。それでもあたりを探し回った。

その最中、左俣の谷中がパッと白になった。雪崩だ！と叫んで目の前の小さな岩のそばへ伏せる。体に風圧を感じた。それは一瞬のことであった。立ちみるとあたりは何の変化もなかった。上部ではだいぶ積もっていたのだろう。テントのすぐ近くで何の音沙汰もなく2人は消えて行った。神隠しにあったような気さえする。

狭い左俣の谷で圧縮された雪煙は広い二俣で解き放たれたのである。それはホウ雪崩と呼ばれる種類のものではなかった。三浦まで失ってはならないと考えて探すことを中止してテントを移動。岩に接近させて明日を待つ。23日は快晴となった。もう2人では力が及ばないので、下山し遭難を報告しなければならない。24日から捜索に入ったが現場は雪を排除するには多くの人手を要する状況であり、翌年の融雪を待つことになった。

多くの人達が捜索に協力してくれた。5月から13回のパトロールと3回の合宿を重ねた。7月26日雪の中にザイルの1部を発見。そこから掘り進めて2人の遺体を発掘した。28日上市警察署神保実巡査に検死してもらい、ご遺族も池ノ谷二俣まで登っていただき現場で茶毘にする。

この日は石黒清蔵氏が橋本廣氏と登ってこられ早めに下山されたが、その帰路小窓尾根で木に足をとられ4mほど転落された。肋骨が折れ肺に刺さっていたのに自力で下山された。そのことが元で30日に亡くなられた。まことにお気の毒なことであった。(注1)

城、網谷の事故を振り返って考えると、気持ちが動転し、冷静さを欠いていたのだろう。自分の居たテントの付近から探すべきだった。テントのすぐ横にわずかな凹みがあり、そこに2人とも埋まっていたのである。まさかテントから5mも離れていない所にいたとは考えられなかったのである。遭難の悲惨さ、残酷さをいやというほど味わったのであった。(注2)

なお、つづく1月には池ノ谷から劔に登った千葉稜溪山岳会6人が遭難し3人死亡している。

チロルを創業する

この遭難の捜索で私は会社を休むことが多く、その前年 1965 年もネパールヒマラヤへの山行で 3 カ月休んだこともあり、会社に居づらくなっていたので退職。1968 年山の専門店チロルを創業する。富山市桜町交差点に六坪の小さな店だった。

店を開いた次の年の冬は劔岳大量遭難の年であった。小窓尾根で 8 人、早月尾根で 22 人、赤谷山で 15 人、毛勝山で 13 人など 15 パーティ 81 名が遭難し、20 名という大人数の死者がでた。それは広範囲であり、山岳警備隊も発足 4 年目にして大きな試練を味わっている。四四豪雪と名付けられた大雪の冬でありこれだけの大量遭難に 20 名ほどで対応できるものではなかった。(注 3)

そしてこの年、梅雨末期は四四水害と呼ばれる未曾有の豪雨で、山へ通ずる道路や鉄道はすべて通行不能となり、登山者は山へ入ることもできず、仕入れた登山用具は買う人がなく在庫の山となった。早月尾根から転落して行方不明となっていたピッケル山友会の奥村謙三郎の捜索の最後として、秋になって伊折から歩いて三浦と 2 人東大谷左俣を登ったが、立山川も河床の岩盤まで露出していて水の威力を見せ付けられた。

金沢工業大学山岳部コーチ時代

1970 年、三浦が金沢工業大学に入学した。山岳部に入部したが、新しい大学であり山の指導者がいないので、私にコーチを引き受けてくれということになり、4 年間学生と岩登りや冬山を共にした。白峰村の廃校となった分校をベースにして冬の白山へもよく通った。ゴールドデンウィークと夏山は劔岳で活動をしていた。

1971 年 5 月 1 日、予定の行動を終わって劔沢キャンプ場でのんびり山を眺めていた時、一服劔の右側にスキーをはいた 3 名のパーティが姿を見せた。斜滑降で滑りだすとスキーのシュプールから雪が崩れ、人が巻き込まれていった。キャンプ場が大騒ぎになった。皆いっせいに走りだし掘り出したが、湿った重い雪に押しつぶされ 1 人は死んでいた。それは大阪府大 OB の人達であった。

次の 1972 年も劔沢にテントを張っていた。入山時に劔沢小屋へ顔を出し文蔵に一言挨拶してテントへ向かったのである。5 月 1 日、山岳警備隊が八ツ峰六峰に遭難者ありと連絡を受け、見に行ったところ、長次郎谷に 2 名の遺体があり、C フェースの岩場にザイルが下がっておりその末端にも遺体があるらしいという。文蔵は郁夫を呼んで来いと日下昭(山岳警備隊)に命じた。彼はテントへ私を呼びに来る。夕食の後小屋の食堂で遺体収容のミーティングが開かれたが、一体何人、誰が死んでいるのかもわからない不思議な事故である。5 月 2 日は寒冷前線の通過で真冬のような大荒れ。翌 3 日は快晴になって、私は金沢工大生 10 名を連れて収容に加わる。遺体は 4 人であった。長次郎谷に 2 人と岩場に下がっているザイルにも 2 人が岩と雪の間に埋まっていたのを掘り出す。凍ってカチカチの遺体を長次郎谷出合まで運ぶ。(注 4) 背負って劔沢まで登らねばならないかと覚悟していたが、小さな竹トンボのようなヘリコプターが収容し運び去っていった。(注 5) つづく

注 1 石黒清蔵氏(日本山岳会、会員番号 613) 1924(大正 13)年 8 月池ノ谷左俣を下降。1925 年 8 月右俣を初登攀

注 2 「池ノ谷遭難報告書」1969 年魚津岳友会

注 3 「ピッケルを持ったお巡りさん」1985 年山と溪谷社刊 白い悪魔 梶田正執筆

注 4 「ピッケルを持ったお巡りさん」 同上 長次郎谷の悲劇 日下昭執筆

注 5 県警ヘリコプターが最初に運んだ遺体だと思う

東南アジアの最高峰Mt. キナバル登頂の旅 2月10日～月15日

木戸さんに誘われて、「しろがねスキーと山の会」の皆さんとキナバル登頂の旅に参加させて頂く事になりました。外国は20数年振りです。パスポートを更新し、準備に取り掛かりましたが海外ではISのテロ、台湾の飛行機事故があり、不安の中、2月10日富山空港より雪の為2時間30分遅れで、14時30分アジアナ航空で出発しました。ハブ空港の仁川空港乗換で空路ボルネオ島のクタキナバルへ向かう。日本とマレーシアの時差は1時間です。11日AM1:30クタキナバル空港に着き、現地ガイドの出迎えでホテルに入りました。シャワーと明日の準備をして2時間位の眠りでモーニングコールでした。ホテルの朝食はバイキングで香辛料の利いた中華料理、マレーシア料理が中心です。宿泊者は世界各国からで、言葉も色々で解りません。バイキング料理は美味しく沢山食べました。



11日午前中はサバ州立博物館や州立モスクの見学をし、キナバル山の山麓クダサンにバスで移動する。高原野菜の産地で、荷台に山積にしたトラックが数多く往来している。昼食後、道路わきの屋台のようなマーケットで行動食用フルーツ等を買って、山麓のホテルに入る。宿泊のホテルの部屋は全日程、私一人で不安もありました。このホテルのシャワーは使うと次第にお湯が水に近くなり止めました。夕食は海鮮鍋でエビ、イカ、貝類等に新鮮

野菜、キノコ等のシンプルな味で美味しかったが、何度も停電になり、闇鍋をつついていました。部屋で明日の準備中も何度も停電となり、ヘッドランプを使う。

12日朝、バスでビジターセンターに行き、一日200名までの登山登録手続きをし、標高1800m登山口パワーステーションから若きガイド、ポーターと共に出発。熱帯雨林のジャングルの中、整備された登山道を登ります。日本での観葉植物、蘭系、ジャクナゲ、ペゴニア、インパチェンス等、食虫植物のウツボカズラ等の珍しい植物を観察、楽しんで進みます。30～40分間隔にトイレ付きのシェルターがあり休憩ができます。行き交う人達は若く『こんにちは、こんにちは』と、もはや世界共通語のようでした。



標高3272.7mのラバン・ラタ・レストハウスに15:50到着。玄関デッキからキナバル連峰がハッキリ見え、ボルネオ頂点のチャレンジが楽しみです。レストハウス内はインターナショナルで賑わっています。日本人も単独や3～4人グループで来ていて、さすがマレーシア初の世界遺産キナバル公園です。私達は二階の二段ベッド2部屋です。生水は飲めないからミネラルウォーター、レストハウス内のサバティー、ビール等です。夕食を済ませて夜中の2:30出発なので早めにベッドに横になりましたが眠れません。1:30に起きて軽く食事をする。食べ過ぎは高山病になり易いとの事。寒さ凌ぎにフリース、合羽を着、ヘッドランプを点けて出発。長蛇の明かりが星空に続きます。果てしなく続く、むき出しの花崗岩の岩盤は意外と歩きやすく、身体も馴れた様で息苦しくありません。寒さの中、白々と夜が明けるのは神秘的でドラマチックです。最高峰ロウズピーク

4095.2mに6:30に登頂。木戸さんの80歳(傘寿)記念登頂おめでとうございます。米田、木戸、



山田、山岸で記念写真を撮る。見晴らしが良く、素晴らしい、の一言です。サウスピークまでの、その他の奇岩ピークを眺めながらゆっくり下山する。

ラバン・ラタ・レストハウスに9:40に戻り、朝食終えて11:00に下山開始する。標高

1800mのパワーステーションまでの下りは長い。15:45ゲートに着き、後続を待って、ビジターセンターより16:30にバスでコタキナバルのタンジュアルビーチリゾートホテルに向かいます。皆さんの登頂の歡喜が車内で盛り上がっています。

リゾートホテルに7:20に着き、急いでシャワーして、レストランで登頂乾杯。ホテルのサプライズで木戸さん80歳のバースディプレゼントにケーキとスタッフの合唱がありました。翌日、14日は10:00まで部屋が利用出来、朝食後しろがね山の会の皆さんは船に乗り、島のビーチで水着にシュノーケル付けて海中散策に。私達3人は(米田、山田、山岸)タクシーでショッピングモールに行く。中国人も多く旧正月の春節祝いの準備中でした。青果市場は3階建てで、とにかく独特の香辛料の匂いが強い。2階は200軒近い店が果物、野菜を盛り上げて迷路みたいでした。3階はレストランですが、食べたい物に困り、そのまま帰って来ました。



部屋に戻らず一人ホテル内のビーチを散策する。海辺のヤシ並木に夕日が沈み、南国の素敵な光景に感動しました。夕食はタクシー2組に別れ、中西さんお勧めのホテルの外にある中華海鮮レストランに行きました。円卓に次から次と料理が運ばれ、どれもとても美味しく、ビールも進みます。私はエビの蒸し煮がとても美味しかったです。ホテルに戻り、帰り支度をし、PM10:00ホテルからコタキナバル空港に行き、AM2:00アジアナ航空で空路、ソウルへ。仁川空港ではAM8:



00乗換えて富山空港AM11:00無事着陸。帰国手続き後に解散しました。有難う御座いました。キバナル登頂の旅はサポート役で同行しましたが、木戸さんが一番元気で楽しかったです。チャンスがあれば、又チャレンジしてみたいです。お疲れ様でした。(山岸和子 記)

※2015年1月30日~2月3日、別の山岳会(山岳フィールド倶楽部)の企画で、富山支部会員3名が、ほぼ同じようなコースを巡ってきた。参加者: 渋谷 茂、菅田静子、川田邦夫

その後、ボルネオ一帯に大きな地震があり、キナバル山に登山していた多くの登山者が遭難したとのニュースが入った。日本人登山者も一人亡くなったという。最後の写真にある双耳峰の岩が崩れての災害だった。我々は良い時に行ったと思いました。

ネパール大地震に支援を！



4月25日に発生したネパール大地震は、死者8,500人以上、家屋の倒壊、道路の損壊と甚大な被害をもたらしました。富山県に住むネパール人の呼びかけにより5月3日には富山市内で支援のための第1回緊急ミーティングが開かれ、災害支援の母体となる団体「富山ネパール文化交流協会」（ダルマラマ会長）を設立しました。5月15日～22日には「アジア子

供の夢」（川渕映子代表）の支援も得て、ネパール人2名が故郷の村を訪れ、被害の状況を直接確認するとともに、食料、トタン板等の緊急支援物資を直接届けました。これに合わせ、県内で開催されるイベントで義援金を募るとともに、チャリティーコンサート等を通じて支援の輪を広げ、ネパールの故郷復興に役立てたいと考えています。詳細は「富山ネパール文化交流協会」でネット検索してください。会員皆様方のご支援をお願いします。（北田幹夫 記）

<今後の予定>

- 7月例会山行 僧ヶ岳 7月11日(土)
- 8月例会 8月4日(火) 富山市民交流館学習室5 暑気払い(高志会館ビアホール)
- 8月例会山行 飯豊山 8月7日(金)～9日(日)
- 9月例会山行 南アルプス聖岳 9月10日(木)～13日(日)

編集後記

例年6月はじめに行っている播隆祭も今年で30回目となった。この祭礼を企画された先輩方に改めて敬意を表する。一般の参加者も含めて50名程の人が集まったようだ。集まりを横目に見ながら高頭山を目指して通り過ぎてゆく人達もいる。地元の河内村の生家に係わる方々も参加されているが、高齢で体の動きが不自由と思われる方もおられる。若い時代をこの地域で過ごされた本多会員の講話は昔の田舎の状況を感じて興味深かった。現在、登山人口も増え、整備された登山道を使う人達は、槍ヶ岳を開山された播隆上人の業績を改めて考えてみる良い機会ではなかろうか。富山支部会員の高齢化も進んでいる。経験豊富な先輩の岳人達からいろんな知識を学び、若いリーダーが育ってくれることを願っている。入会の窓口も広がっているので、多くの元気な岳人の入会をもっと勧めたいと思う。（編集委員長 川田邦夫 記）

公益社団法人日本山岳会 富山支部会報 第99号

発行者：山田信明 編集者：川田邦夫

事務局 〒939-8095 富山市大泉中町 7-52-204 河合義則方

電話 076-492-3936 , 090-4326-6197 Eメール kawa-mori55@air.ocn.ne.jp